

令和4年4月
一橋大学

令和4年度一橋大学学校推薦型選抜第二次試験

出題の意図等 【小論文】

商学部

設問 (1) : 課題文該当箇所に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：『ザ・ワイヤー』に登場する米国の警察署では、警察署長は犯罪の解決件数や麻薬関連逮捕件数、犯罪率などの数値目標を達成することに執心している。それは市長など政治家や警察が、犯罪を抑制出来ていることを証明する数字を要求するからである。大物の麻薬王を一人逮捕することに時間をかけるよりも、末端の麻薬密売人を数多く逮捕した方が、期間内での逮捕件数は増える。本当はそれでは解決には至らないのだが、数字上は警察署長にとっても市長にとっても望ましい結果となるため、小物の密売人を大勢逮捕すると筆者は考えている。

設問 (2) : 課題文該当箇所に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「上澄みすくい」とは、ある事象の確率を高めるために、その確率を下げるリスクがある事案を最初から母数から外しておくことである。外科医は手術の成功率が高ければ評判が良くなり、報酬も高くなる。そのため、高い成功率を維持しようとして、失敗するかもしれない難しい症例は予め除外するという、この戦略を取った。

設問 (3) : 課題文該当箇所に関する論旨が適切に把握できているか、また簡潔に要約できているかを問う問題。

解答例：「測定基準への執着」とは、標準化された測定によって経験に基づく判断を置き換えることができる、そしてその測定結果を公表することで透明性が担保され、説明責任を果たすことができるという考えから、測定基準を過度に重要視することである。筆者は、測定そのものは適切に使用すれば有益になり得ると考えている。しかし、実績を測定し、それを説明責任の名の下で公開し、またその結果によって評価され報酬が支払われるようになれば、より高い評価や報酬を得たいと人々が考えることで、その測定基準が一人歩きし、とにかくその基準をクリアさせることばかりに人々が注力してしまう。測定基準は、標準化されたものであったとしても必ずしも本当に測定すべき、測定に値するものとは限らない。しかし、一旦基準が定めれば、それ次第で評判や報酬が決まってしまうので、間違った方向であっても基準をクリアさせるための努力が行われてしまうと筆者は考えている。

設問 (4) : 課題文の内容について理解した上で、自身の意見を明確かつ論理的に説明することができているかを問う問題。

解答例：測定基準への執着は、インターネットの動画配信サービス YouTube でも見ることが

出来る。YouTube では誰でも動画を配信することが出来るが、動画配信によって収入を得るためには、動画再生回数を増やすことが不可欠である。YouTube の動画に広告を掲載すると、動画の再生回数に応じて広告収入が得られることになっているため、配信者 (Youtuber) はいかに再生回数を増やすか、つまりいかに多くの人に視聴してもらうか、そして継続的に視聴してもらうかについて様々な工夫をしている。中には、再生回数を増やすために検索されやすいキーワードをタイトルにつけるなど、中身よりもタイトルで勝負するコンテンツもある。さらに迷惑系と言われるような、あえて迷惑行為を行う場面を撮影させそれを配信することで、人々の怖いもの見たさなど関心を煽るような配信者もいる。コンテンツの内容は測定が困難だが、再生回数は測定しやすいことから、このような事態が生じていると考えられる。

なお、上記はいずれも解答例であり、その他のアプローチを排除するものではない。

経済学部

設問 (1) : 分業による利益 (生産性の向上) が社会の豊かさのカギとなること、また、分業の利益が発生するメカニズムを理解しているかを確認する。

設問 (2) : 制度的な理由によって、分業の利益の果実が広く共有されない可能性を指摘し、その理由として、税制の変更などの歴史的な背景について考えてもらう。

法学部

本出題は、能力主義がなぜ、いかにして支配的となり、それがいかなる社会的弊害をもたらすにいたっているかを考察する政治哲学者・マイケル・サンデルの『実力も運のうち——能力主義は正義か？——』を題材として、受験生の次のような能力、すなわち、法学・社会科学を学習するための基礎学力である文章理解力と表現力、および思考的応用力と説明・弁証能力を試すものである。

設問 (1) : 主に文章理解を問う問題である。正義にかなう社会の建設のあり方をめぐって、市場主義リベラリストと福祉国家リベラリストは過去半世紀にわたり対立してきたが、著者・サンデルは両者の意外な共通性を発見している。その共通性とは何かを説明することが求められている。

設問 (2) : 福祉国家リベリズムの哲学の弱点に関する著者・サンデルの見解を踏まえたうえで、受験者自身が福祉国家リベリズムの哲学を擁護するという役割を与えられた場合にはどのような議論を展開するのか、説得力のある議論を展開することが期待されている。

社会学部

設問

社会生活は、立場を異にする人々が、たえず変化する状況のなかで様々な約束事に従いながら、それぞれ異なる意図や目的をもってやり取りすることで成り立っています。だからこそ、誤解やすれ違いを避けるために、やり取りの最中の発話や行為には明瞭さが求められる傾向があります。しかし、いかに曖昧さを避けようとしても、自らの発話や行為が立場や意図を異にする人々に思い通りに受け取られないことは、しばしばあることです。おかれた状況に対する理解や、重視すべき約束事に関する考え方が異なる場合には、なおさらのことです。他方、円滑にやり取りするために、あえて曖昧な発話や行為が選ばれることもあります。社交辞令における様々な婉曲表現、初対面時の表情や振る舞い、周囲の人々の立場を慮るときや、相手の意図や目的に探りを入れるときなどの言動などが、これにあたるでしょう。こうした事例が示すのは、曖昧さが時に、自動車ハンドルの「遊び」にも似て、社会生活のなかで積極的な役割を果たすことです。白黒を明瞭に区別するデジタルな思考に対する、白でも黒でもない曖昧さに着目するアナログな思考の利点も、そこに見いだすことができます。

本設問では、社会生活の具体的事例から、曖昧さのこの両面性を見いだしてくる洞察力、それを分析する思考力、思考を整理し論理的に提示する文章力を評定することを意図しています。